［明治学院大学］

学生とともに創る横浜キャンパスプロジェクト

望月　幸光●明治学院大学事務局次長兼横浜管理部長

1　横浜キャンパスプロジェクト発足の背景

明治学院大学横浜キャンパスは、6学部15学科の1、2年生を中心に、約6500人が集うキャンパスである。充実した4年間を送るためにも、まず学生生活をスムーズにスタートさせることが課題となっている。

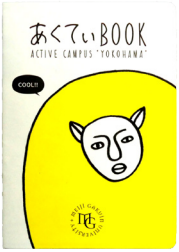
さて、本学の教育理念は〝Do for Others（他者への貢献）〟である。これは、聖書マタイによる福音書7章12節〝Do for others what you want them to do for you.〟（人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい）から引用している。前節を含め意訳すると「人に何かをしたいと思うならば、その前に自分自身がいろいろな経験を積みなさい」である。つまり、〝Do for Others〟の実現のため、大学として学生がいろいろな経験を積み、成長していく場を提供する必要がある。

また、横浜キャンパスは2015年度に開校30周年を迎えた。30周年を迎えるに当たり、「学びやすく」「安心して過ごしやすい」キャンパスを目指し、2013年度から3年計画で「横浜キャンパス向上計画」と称し、図書館など既存施設の改修、学生アメニティ施設の新設を実施した。しかし、施設面のみ充実させても学生生活の向上にはつながりにくい。施設の整備というハードの部分を、どのように学生成長の機会というソフト面につなげるかを考える必要が生じた。そこで教育理念の実現に向け、そして横浜キャンパス向上計画とタイアップした諸策を検討する一つとして、2013年度末に「横浜キャンパスプロジェクト」を発足させた。

2　横浜キャンパスプロジェクトの具体的内容

本プロジェクトは、現在、八つのチームで構成されている。例えば「ピア・サポートプロジェクト」では、「キャンパスコンシェルジュ」と称するピア・サポート学生チームと協働し、新入生や上級生の学生生活支援の検討・実施を行っている。具体的には、大学生活に不安を

抱える新入生の支援、グループ学修などにおける施設利用のサポート、W·i-F·i講習会の開催、事務部署への橋渡しなどである。また、キャンパス内の自学自修施設が簡単にわかる小冊子「あくてぃBOOK」の発刊も行っている。



自学自修施設を紹介した小冊子

「飲食環境の充実プロジェクト」の目的の一つは、学生に「食」に対して興味を持ってもらうことである。そこで、昼食を挟んで授業を受ける学生が多い横浜キャンパスにおいて、学生の企画による「食堂レシピコンテスト」を実施。受賞作品は、実際に食堂でメニューの一つとして提供している。ほかにもヤギによる除草を企画・運用するプロジェクトなど、どのプロジェクトも企画の段階から学生と一緒に検討する態勢をとっている。

なお、それぞれのプロジェクトにおいては、「企画実施により複数の効果（一石三鳥、四鳥）を得ること」を念頭において運用している。

3　横浜キャンパスプロジェクトの特長

このプロジェクトの最たる特長は、「学生」が何らかの形で加わり、教職員と協働していることである。これは、本プロジェクトが前述の教育理念を実現するために、学生が直面する事々に対して学生の視線・意見が生かされるべきとの判断による。

もう一つの特長は、本プロジェクトが、トップダウンではなく、横浜キャンパス所属職員からのボトムアップで発足したことが挙げられる。普段、学生と直に接している職員の意見は非常に貴重であり、しかも部署横断で取り組んでいるプロジェクトのため、多角的な観点から学生の様子を共有できるメリットがボトムアップにはある。なお、プロジェクトメンバーに限らず、バックヤードの部分で支えている全ての職員・派遣社員なども含めてプロジェクトの一員として考えていることも特長といえる。

4　おわりに

明治学院大学は10年計画「MG DECADE VISION」を掲げており、横浜キャンパスプロジェクトの各計画も、この「MG DECADE VISION」が目指す取り組みの一つである。今後、PDCAを実施し、各プロジェクトの融合や新プロジェクトの発足なども検討しながら、現状に即した柔軟なプロジェクトとして展開していきたい。

［追手門学院大学］

全教職員で推進する企業開拓プロジェクト

下川　邦泰●追手門学院大学就職・キャリア支援課長

1　プロジェクト内容

本学は2016年に大学創立50周年を迎え、さらに2018年には学院創立130周年を迎える。この大きな節目に当たって現在推進しているのが、全ての教職員による企業開拓プロジェクトである。就職部門が企業開拓の中核を担うということに変わりはないが、これに全教職員が関わることによって開拓の規模を一気に拡大するとともに、教職員の意識改革につなげるのが大きな狙いである。

2015年度からスタートしたこのプロジェクトは、学院の役員による大手企業訪問を皮切りに、本学勤務の年数が長いベテラン職員による「本学卒業生が社長を務める企業」の訪問へと発展した。また、本学は1年次からインターンシップ参加を推進していることもあって、夏期インターンシップにおいては、大学紹介の全ての実習先企業を前述のベテラン職員が訪問・視察し、担当部署に対して改善提案を行っている。さらには管理職がこれに続き、採用実績が近年途絶えている上場企業の訪問を行い、企業の要望や大学への期待値を確認するとともに、学内で開催する「企業と大学との交流会」の参加を依頼した。一方、教員については、全学FD研修会において、ゼミ学生就職先企業への担当教員による訪問を要望するとともに、教員が持つ企業とのパイプを大学全体につなげるよう発信を行った。

2　プロジェクトの目的

プロジェクトの主な目的は二つある。一つは、学生の就職先企業の開拓という進路・就職の観点に立脚した目的である。大学におけるさまざまな教育改革の取り組みに応じた就職先を確保し、学生が社会の多様なフィールドで活躍するための土壌作りの推進を目指している。もう一つは、教職員の意識改革による組織力の向上である。大学に勤務していると、特定の部署を除いて、同じ大学

関係者以外の人間と関わる機会が限られるため、狭い世界の中だけで過ごしてしまいがちである。しかしながら、大学の社会的使命は社会に有為な人材を輩出することであり、大学で働く教職員こそ社会と広く接点を持つことが求められる。企業訪問を通じて社会と広く関わることによって自己を研鑽し、常に社会的感覚を持って日々の業務に取り組む意識を組織に浸透させたいと考えている。

「企業と大学との交流会」の様子

3　プロジェクトの成果と今後の展開

アプローチを行った企業数は、本学院の役員が１００社以上、ベテラン職員が７００社以上、管理職は２００社以上となり、合計１０００社を超えている。これに、就職部門による企業訪問約３００社を加えると、プロジェクト開始以降の約10カ月で１３００社以上の企業とコンタクトを図ることができた。また、２０１６年12月に学内で開催した「企業と大学との交流会」は、初めての試みであったが目標としていた50社以上の上場企業の出席をいただくことができた。さらに、組織内においても、各部署が業務上の関わりがある企業を就職部門につなげる動きや、企業との交流会において中堅職員に接待を担当させるといったスタッフ育成の動きが広がってきている。

しかしながら、実際には取り組み始めてまだ1年も経過していない状況であり、このプロジェクトの成果については、具体的な成果だけでなく副次的に得られた効果も含めて、今後の検証を継続して行いたいと考えている。

［昭和女子大学］

クリエイティブプロジェクト

保坂 邦夫●昭和女子大学広報部長

二、三十歳代のまだ経験の浅い若手職員が大学の課題を見いだし、解決に挑戦する。２０１５年、ＳＤ研修の一環で始まったこのプロジェクトに、教務や学生支援、アドミッション、キャリア支援など、さまざまな部署から25人の職員が招集された。年齢も違えば担当も異なる人たち。日常業務をこなしながら、知恵を出し合って経験したことのない共同作業に取り組むのは、予想より大変だった。担当業務以外に時間を割くのは気がとがめる。そんな感想も聞こえた。周囲の理解と協力が必要だった。

クリエイティブプロジェクトの総合テーマは「新しい価値の創造」。企画・計画・提案・実行・成果検証まで一体となった、提案型の研修である。さっそく四つのチームに分かれて活動が始まった。

プロジェクトはリーダーを1人、サブリーダーを2人、チームリーダーを1人ずつ配置して組織を編成。進捗状況を管理し、情報を共有した。また、理事2人がチームのメンターを務めた。自分たちの考えが大学の新しい価値となるかどうかを相談する機会となった。

あるチームは、大学のプロモーションビデオを完成させた。職員のサポートを受けて、学生が企画・撮影・編集の全てを担当した作品である。キャンパス編、授業編、留学編、三軒茶屋編と、素人らしい新鮮な学生ならではの力作がそろった。今まで一緒に活動する機会がなかったため、学生を集めることから苦労したが、体験を通して学ぶことができ、収穫は大きかった。

クリスマスには、他のチームがキャンドルナイトを実施した。学生と一緒に約1万個のＬＥＤを並べ、日暮れから多くの見学客を迎えた。本学の新たな風物詩の誕生だった。

そして、大成功だったのが11月の「女川灯紙祭（おながわランタン）」。手作りのランタンをキャンパスにともし、復興に取り組む宮城県女川町の人たちへエールを送ろうと企画したイベントである。

本学の学生は、震災直後から女川町でボランティア活

動に取り組んでいる。今回の企画は、現地でランタン祭を体験した学生の提案だった。被災地の報道が少なくなる中、みんなで女川を考えるきっかけをつくりたい。この思いを実現させようと、職員と学生がプロジェクトチームを編成した。

ランタンは二重の紙袋の片方を切り抜くもので、中のLEDによってメッセージが浮き出る。誰でも簡単に作れるが、広大なキャンパスを彩るには相当な数が必要だった。チームはポスターやチラシで学生や教職員に呼びかけ、ワークショップを開催。本学の附属校や近隣の商店にも参加を依頼した。地域を巻き込んで全学園で取り組んだ結果、1864個のランタンが完成した。

「女川灯紙祭（おながわランタン）」で学内にともされたランタン

女川町からお客様を迎え、灯紙祭が始まった。ランタンの道はメッセージを読む人たちで埋まり、SNSで写真とメッセージをツイートする来場者も多かった。また、地元の新聞にはカラー写真入りの大きな記事が掲載された。学生たちのエールが女川町に届いた。その後、ランタンは女川町に送られて現地でともされることになった。

学生と取り組む――手探りで始めたクリエイティブプロジェクトだったが、職員の熱意とチームワークが成功させたと感じる。

プロジェクトは、若手職員チームが学長や副学長にプレゼンテーションし、互いに意見を交換しながら進めていった。日常では、若手職員がトップの考えを直接聞き、意見を交換する機会はほとんどない。部署の違う職員との共同作業も限られてしまう。こうした環境の中で、今回のプロジェクト活動は若手職員に刺激を与え、自分たちの力で新しい価値を創出しようとする意識を持たせただろう。今年度もプロジェクト活動は進行している。